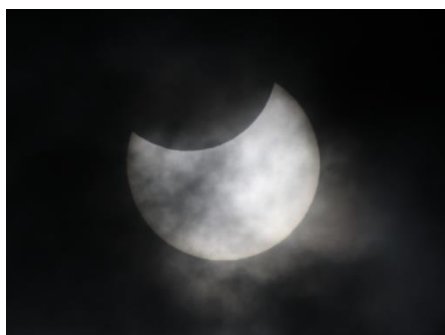




愛川ふれあいの村 1月の風景

2019年 1月 自然のたより

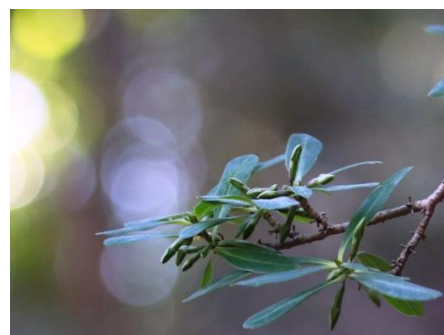
寒の入りも過ぎ、寒さが肌身に染みる季節となりました。村は静かな日が多くなり、鳥たちの羽ばたきも聞こえるほどです。寒い地域から訪れる“冬鳥”の姿も見えはじめました。虫たちは家の隅の暖かい所や土の中などで冬眠しているのでしょう。そんな中でも、春はまだかと生き物たちが準備をしています。



部分日食（1月6日）



リュウキュウサンショウクイ



オニシバリ（来月開花か）



ヤマガラ



ヘラクレスカメムシ（♂）



アジサイの葉痕



カシキカミを食べるカシ



トラツグミ



ルリビタキ（♀）



カシキカミの集団越冬



アカボシゴマダラの越冬



ハイタカ



シモバシラ



テイカカズラの綿帽子



ロウバイ

◆フユシヤク◆～その進化(推測)～

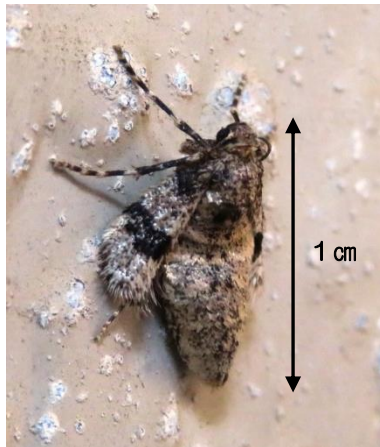
冬だからこそ、元気に活動をはじめめる虫がいるのを知っていますか。『フユシヤク』という蛾です。名前の通り幼虫はシャクトリムシで、冬に成虫が飛び回ります。飛び回っているのはすべてオス。メスは飛べない…というよりも翅がないのです。視界に入っても気にならないほどの小さな蛾なので、見過ごしていることが多いと思います。1月と2月に飛んでいる蛾はフユシヤクと正しいです（今年は暖冬のため、一概には言えませんが…）。

では、なぜわざわざ冬に出てくるのでしょうか。天敵が少ないからなのか。確かに、カマキリなどの肉食性の昆虫はいませんが、鳥はたくさんいますよね。しかも、落葉で視界良好。でも安心。鳥も寝静まる夜に活動する種類が多いのです。この理由から、シャクトリムシが「そうだ！冬に大人になればいいんだ！」と考えた結果なのだと思います。

冬には、花もないし虫もない、葉もないし、鳥以外には声もしないと思っている方が多いのではないのでしょうか。そんなことはなく、生き物は必ずどこかに潜んでいます。食べ物など競争が激しい春から秋を避けて冬に悠々と生活をするフユシヤクはとても賢い進化を遂げた虫ですね。

何もいないと思われがちな冬だからこそ、活発に活動している虫がいるのです。知っているのと知らないのとでは対象への見方がずいぶん変わってきます。ぜひ、いろんなことに興味を持って接してください。（石川）

ナミスジフユナミシヤク♀



★スナゴケ★

村の中で誰もが毎日見ているが、ほとんど気にしていないコケがスナゴケである。河原や山地の日当たりの良い場所に白っぽい黄緑色の群落を作っている。

スナゴケという和名は、砂地に生えることが多いことが由来だ。村内では、会議室の屋根に多く生えている。長時間の直射日光にも負けず元気に育つので、最近は屋上緑化植物として役立っている。村の会議室は夏涼しく爽やかで冷房を必要としない。あまり目立たないが、その恩恵は大きい。

（吉田）スナゴケ



★豆腐★

日本の食卓に欠かせない豆腐にも、旬があるのはご存じですか？豆腐の原料である大豆の収穫は10月から11月にかけて行なわれ、水分を飛ばし終えるのが1月から2月頃になります。そのためこの時期が豆腐の旬といわれるのです。

大豆を原料としているため、豆腐は栄養満点！タンパク質、カルシウム、ビタミンが豊富で、鍋に豆腐を入れるだけで代謝促進効果がアップします。冬と言えば鍋、鍋と言えば豆腐。旬の豆腐を食べて冬を元気に過ごしましょう！

（清水）村で作った豆腐



↑ジョウビタキ

◎二月の注目ポイント◎
鳥類の中には、冬鳥と呼ばれるものがあります。秋や冬になると、暖かい地を目指して「渡り」をする鳥のことがです。
普段は日本よりも北の地域で繁殖し、越冬のために日本に渡ってきます。ウソやシメ、ジョウビタキなどは例年村で観察されており、シメは今年すでに姿を現しています。これから徐々に姿を現すであろう冬鳥たち。チベットや中国に生息するジョウビタキも、冬の間は日本で過ごします。海外に生息する生き物を観察できる貴重な機会ですので、村の職員もカメラを持って撮影に励んでいます。
渡り鳥の中には、数千キロの距離を移動する鳥や、高度二千メートル以上の山脈を越えていく鳥もいます。想像を超える旅をしてきた彼らは冬の間だけ日本で暮らし、春にまた渡りを行います。そんなたくましい鳥たちを、よく観察してみましょう。
（大谷）

発行者：神奈川県立愛川ふれあいの村

TEL：046-281-1611 HP：<http://fureai-aikawa.com/>

写真：吉田文雄・石川雄馬

編集：吉田文雄・石川雄馬・大谷遼



愛川ふれあいの村で、検索★